
男女共同参画標語
最優秀賞
「男女とも 歩みあわせて
輝くとりで」
 宮下拓也さん 藤代南中学校(当時)

39号

平成28年3月1日発行

風



 優秀賞
 学生部
 「同じだね 働く力と 支える心」
 「認め愛 支え愛 補い愛」
 「男女の手 大きき違えど 価値は同じ」
 一般部
 「女の手男の手 合せた未来 取手から」
 「役割を 担う意欲と 任せるゆとり」



市の防災訓練の様子(初期消火訓練バケツリレー)

東日本大震災では、非常時における女性や不利な立場にある人たちへの配慮が不足していたことが今後の大きな課題として震災後に取り上げられました。衛生用品等の生活必需品が不足したり、授乳や着替えの場所に困ったり、女性でなければ気づきにくい配慮が不足していたといえます。阪神大震災でも同様

欠けていた女性の視点

防災に男女双方の視点を!!

～変わりゆく防災のあり方～

今年3月11日、東日本大震災から5年が過ぎようとしています。5年という歳月を経て、直接被災していない人たちの記憶からは、あの全国民を戦慄させた忌まわしい記録映像さえも薄れてきているように思います。しかし、自然災害はいつ、どこで襲ってくるかわかりません。昨年9月の常総市での水害は記憶に新しいところですが、「天災は忘れたころにやってくる」その真意は、過去の経験を忘れ、教訓を生かさなければ、同じことを繰り返す、ということではないでしょうか。

の問題が起りましたが、その教訓は生かされませんでした。震災直後は現場が混乱して対応が困難だったとの意見もありました。

しかし、平時から男女共同参画が根付いていけば、非常時であつてもおのずと女性視点の対応が取り入れられたはずで

非常時に増幅される性別役割分業

日常において性別役割分業が根強いと、非常時にその傾向が増幅されます。東日本大震災の避難所の多くは、男性がリーダーを務めました。男性中心の運営の中で、女性は遠慮してしまう状況が生まれました。

男性が運営を担い、女性は炊事や掃除に従事するという暗黙の決めごとが、結果として、意思決定の場に女性の声が届かない状況を作ってしまったのです。

大きな災害では、避難所や日常と異なる状況での生活が長期化するのを覚悟しなければなりません。偏った役割分業は日を追うごとに重い負担としてのしかかります。東日本大震災においても、避難後のストレスの蓄積で心身に支障をきたす人が少なくありませんでした。

減災という考え方

過去の大規模な自然災害は人智を超えてきました。そこで生まれたのが「減災」という考え方です。従来の「防災」が被害を出さないための直接的な対策であるのに対し、「減災」は、被害が出ることを想定した上で、被害や影響を最小限にとどめることを目的とします。減災には、災害発生時だけでなく、被災後の対策も含まれ、平素からの備えや訓練が重要になります。老若男女さまざまな状況の被災者への配慮が必要なことから、減災の取組にこそ、女性の

参画が不可欠といえます。もちろん、現在の防災には減災の考え方が組み入れられていますが、減災は今後ますます防災において重要な位置づけになるでしょう。

行政の取り組みと市民の意識啓発

現在、市の防災会議には女性委員がいません。地域の自主防災会の代表も男性が務めることが多く、防災に関する女性の参画が遅れている感が否めません。女性の意見や要望を反映しづらい状況にあると同時に、一部の男性に防災活動の負担が集中することにもなります。この傾向は取手市に限ったことではありません。防災会議等の委員は特定の職に限定され、女性が参加しにくい仕組みであることが多いからです。一方で、首長みずから旧態依然の仕組みに風穴を開けて成果を上げて

いる市町村もあります。市民が防災への意識を高めることも重要です。防災の基盤は自助です。自分を、そして家族を守るために、まずは積極的に防災に関わることから始めましょう。

誰もが安心して暮らせるまちは、防災に強いまちです。そして、防災に強いまちは、平時から男女共同参画を実践しているまちでもあるのです。(下園)

平成27年取手市市民活動
育成講座を開催します
「自助・共助で高める地域防災力」
 開催日：平成28年3月6日(日)
 13:30～16:00
 場所：取手市福祉交流センター
 多目的ホール
 対象：取手市にお住まいの方100名程度
 ※防災・減災に向けて市民ができること

「地域に広げよう、健康づくりの輪」が台言葉
取手市食生活改善推進協議会(代表 牧野二江さん)
 毎日の食生活を見直す活動に取り組んでいるのが、取手市食生活改善推進協議会。ボランティアによる活動で、推進員の食への関心と、家族の理解が大きな支えになっていきます。男女共同参画への意識の高まりから最近では、男性料理教室の開催数も増加。着実な成果を挙げるため、減塩対策などを市全域に浸透させようと連携を強めています。



手際よく調理をするヘルスマイトの皆さん

「ヘルスマイト」が愛称

同協議会は養成講座を修了したメンバーで構成されています。活動の原点は「わが家の食卓を充実させ、地域の健康づくりを行う」こと。合併前の取手市で1987年に、旧藤代町で1983年、それぞれ30人で発足しました。現在の会員は45人で、平均年齢は67歳。「健康を守る友達の輪」を意味する「ヘルスマイト」の愛称で親しまれ、「私たちの健康は私たちの手で」をスローガンに①バランスの取れた食生活への改善②子供から高齢者まで対応できる食育アドバイザー③食事バランスガイドの普及・地産地消ーなど、幅広い活動を展開。地区公民館、子育て支援センターなどでの普及活動は、2014年度の場合で1040回、伝達人数8541人を数えました。

手ごたえを実感

推進員の活動は年間を通して忙しい。保健所管内の年度当初の会議を皮切りに、研修会、協議会内部の会議が毎月のように開催されるほか、普及事業も「骨粗しょう症検診での試食提供」「離乳食教室」「男性料理教室」測定器を使った塩分チェック」などが毎月、各所で開かれ、事業

市民ぐるみの運動へ盛りだくさん

長野県で成功した、住民ぐるみの減塩による高血圧対策が推進員の方々の具体的な目標になっています。例えば、減塩チェックも一人が十世帯を担当し、市内全域で一斉に実施すれば、大きな実績が積み上がります。牧野代表は、取手市の糖尿病予備軍が県内市町村中一位という点も重視。「協議会が丸となり、バランスを考えた食の普及に努め、汚名を返上したいですね」と、新たな目標を掲げています。通院回数減など具体的な数値で示せば、市の財政を圧迫している医療費の支出を一定程度抑えられるなど、多方面での良い影響が期待出来るでしょう。そのためにも望まれるのは、推進員の増加と若返りです。昨年12月から養成講座が開かれ、19人が参加しました。修了者は11期生として、4月から活動を始めます。各班長さんたちは「困難もあるでしょうが、息の長い活動」と見守っています。(荒井)

強く、優しく、美しい、世界に誇れる橋 を造る会社「株式会社 東京鐵骨橋梁」

関東鉄道常総線の「ゆめみ野駅」周辺は、街並みが美しく整備され、身近に自然のある暮らしを求める若い方たちが次々と新居を構えています。また、働く場としても大きな企業や商業施設も増えました。この「ゆめみ野駅」と隣の「稲戸井駅」の間にある株式会社東京鐵骨橋梁という企業を今回は取材させていただきました。

歴史と実績

国道294号線の混雑を避けるため、守谷みずき野方面へ裏道を行くと長いフェンスに囲まれたこの会社の横を通ります。鉄道を抜けるらしいことは社名から判断できるのですが、今回訪問させていただき驚きました。



明るく開放的な事務所で仕事をする社員の皆さん

まずは社歴。大正3年に清水組（現清水建設株式会社）の

鉄工部として創業し昨年1000年を迎えました。その間に全国の3000を超える橋造りに携わっています。なかでもレインボーブリッジや瀬戸大橋、東京湾アクアラインなどは世界に誇れる美しい橋です。身近な所でもつくばエクスプレスの荒川橋梁や竜神橋、取手キャンノン前の歩道橋も手掛けています。橋と同様鉄骨部門でも都庁や横浜ランドマークタワー、六本木ヒルズ、歌舞伎座など1500を超えるます。

また、全国に営業所・工場があり、東京橋に本店を構えるものが誇りが本社となりました。鉄骨といえば男性的なイメージですが、本社社員は360人、女性39人。設計部には5名の女性技術者が働いています。その中で活躍している若い二人の

日本のインフラを支える女性たち

技術者にお話を伺いました。小坂香奈さんは入社5年目、大学では建設学シビルエンジニアリングを専攻していました。「学生時代から橋梁に興味があり、この会社に入りました。土木の中でも、紙の設計図から工場内での部材作成、現場での橋梁完成まで、ものづくりのすべてを見るのが出来ることに魅力を感じた。」とのこと。

次の世代へのメッセージ

これから土木をめざす女性に対して、お二人は、「体力面では女性には不利かもしれませんが、女性のコミュニケーション能力や調整能力、女性ならではの視点などを活かして、社会や会社に

最後に

橋が架かることでその地域に

貢献し必要とされる人材となつて欲しい。橋梁という仕事はまちのランドマークともなる社会基盤の製作に携わる大きな仕事です。より良いインフラを未来に残せるよう一緒に頑張っていく仲間（女性技術者）が増えるのが嬉しいですね。」と、後に続く後輩にエールを送っていました。

編集後記

忘却は、人が生きていく上で必要な心の防衛システムです。一方で、経験から学習することで人は成長します。忘れることと忘れないこと。その使い分けを誤ってはいけません。「もし、同じような震災が起こったら……過去の経験と教訓を忘れてはいけません。そう自戒を込めて今回の記事を書きました。」

「図書館は地域の絆・つながりの発信基地」そいであつて働く女性職員

ふじしろ図書館勤務 近藤たまさん

電子書籍やインターネットの普及により、「本離れ」「図書館離れ」が進んでいると言われていますが、様々な企画・立案の実行で利用者の増加、住民に寄り添った運営方法の普及に活発に取り組み図書館司書の方を訪問しました。忙しい最中でしたが、気さくな方で、楽しい雰囲気の中でお話を伺うことができました。

本好きが高じて、図書館勤務に

「大学時代に図書館のアルバイトの経験や本が好きだったこともあり、将来は図書館の仕事をしたいと思うようになりました。幸いにも、図書館開館を控えていた藤代町（当時）職員に採用され、ふじしろ図書館の開館一年前の準備室から関わって来ました。」ゆったりとした館内環境、

研修室、ミーティングルーム、喫茶室の設置、ボランティア活動など現在の運営形式は開館当時の計画に沿ったものになっているそうです。

図書館の一日は、返却された本の整理、全新聞チェック、各公民館図書室などの貸出・返却拠点をつなぐネットワークの図書の輸送準備、と慌ただしく始まります。毎日のルート便スケジュール

に間に合うよう、貸出予約データの収集、図書の受け渡しをし、帰ってきた本は棚へ戻します。この他館内カウンターでの貸出サービスを行っています。

図書館運営は、ボランティアに助けられる部分も大きく、メンバーとの年間行事の計画、実行準備など様々な調整もあります。ボランティア組織は五つの部会があり、総合サポート部、ブックサポート部、おはなしのオルゴール、布絵本の会、いらないばあ、コスモいんかいーから構成されています。現在延べ85名が参加。職員だけでは手が足りない部分を、活発なボランティア活動により支えられています。

楽しむ楽々SSJAY

「好きな仕事なのでつらく感じたりはありませんが、利用者のご希望の資料をすぐに提供で

きなかつたときに、申し訳なきを感じます。私は、児童担当の司書として働いていますが、本と子供に関する知識をもっと増やしたいと勉強中です。逆に、ご希望に沿った本をすばやく提供できたときはやりがいを感じます。また、年間行事の企画・実行では、職員、ボランティアの皆さんとの共同作業はとても楽しみです。たとえば、毎年4月開催の図書館祭りは、周辺の草刈作業、リサイクルブックフェアのための寄贈本の受付と販売会場づくりなど、ボランティアの皆さんの協力が無ければ運営できません。」と感謝していました。

やりがい

利用者数の傾向は、中間年齢層はやや減少気味ですが、乳幼児・児童とシニア層は増加しています。特に乳幼児・児童に対

しては力を入れていきます。おはなし会は幼児・小学生向けを毎週土曜日、乳児向けを第1・3木曜日に開催し、お孫さん連れの方など常に10名程度の参加を得ています。「私も話し手を務めることがあり、小さい子が目を輝かせたり、身を乗り出して聞いてくれるのは苦勞の甲斐があったと感じる時です。また広く世界にも目を向けて欲しいという思いから、『外国語によるお話し会』も毎年9月に開催しています。今年も、取手市国際交流協会のネイティブスピーカーの方の協力でベトナム、ロシア、インドネシア、中国の4ヶ国語による内容で開催しました。更に外国の文化にも親しんでもらうため併設の喫茶室で、特別メニューベトナム風フオウうどんを提供しました。「楽しかった、おいしかった」の一言がとてもうれしく、や

最後に

「図書館を居心地の良い場所に、多くの人が来てもらいたい。静かに読書する場所という伝統的な役割を守りつつ、地域的なつながりを強くするための場所としたい。特に子供のうちから本に親しんでもらいたいです。本を読むと、楽しい世界が広がります。図書館活動を通じて地域のつながりと活性化を目指して行きたい」と語ってくれました。

図書館活動及びボランティアに興味を持たれた方は、ぜひ一度参加体験することをお勧めいたします。（土屋）



児童図書コーナーで親子に図書の案内をする近藤さん

発行日 平成28年3月1日
編集発行 取手市 市民協働課
土屋雅則/下園淳子
河口優子/荒井俊夫
〒302-8585 取手市寺田5139
TEL 0297-74-2141
FAX 0297-73-5995
H・P http://www.city.toride.lbrak.jp/
Eメール s-shian@city.toride.lbrak.jp/
表紙絵 有本 唯

（下園）

（河口）